



# 琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	ルドルフ・シュタイナー全集：邦訳の現状
Author(s)	寺石, 悦章
Citation	人間科学 = Human Science(41): 61-91
Issue Date	2021-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/48326">http://hdl.handle.net/20.500.12000/48326</a>
Rights	

# ルドルフ・シュタイナー全集 邦訳の現状

寺石悦章  
Yoshiaki TERAISHI

## Ein Überblick über die japanische Übersetzung der Rudolf Steiner Gesamtausgabe

本稿はルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner, 1861～1925）の著作・講義等の邦訳の現状について調査し、報告するものである。本稿の後半には筆者が作成した全邦訳リストが掲載されている。

著名な西洋の思想家であれば、全集あるいは著作集といった形で邦訳が出版されていることが多い。そこでは業績の（ほぼ）全体を視野に収めた翻訳・出版の計画が立てられ、主要な訳語なども統一されている。

シュタイナー関係の邦訳は、このようなこととはほとんど無縁になされてきた。大半の出版物がそれぞれ単独で出版されている。そのため現在では、全集のどの巻がすでに翻訳され、どの巻が翻訳されていないのかといったごく基本的な事柄ですら把握できない（あるいは把握困難な）状況にある。

近年はほとんどなくなったものの、かつては出典を明示しない翻訳も少なくなかった。つまりシュタイナーの講義だということまではわかっても、全集のどの巻かはもちろん、その講義のタイトルすらわからないということがあった。

また内容的に関連する講義を、さまざまな巻から選んで翻訳・編集をしたものも出版されている。そのような出版自体は興味深いのだが、全集との対応関係の把握はますます難しくなっている。

筆者は、邦訳の現状を整理した形で示したいと考えている。本稿の執筆、およびそのための調査を行った最大の理由はここにある。とはいえ、これを

一気に完結することは困難であるため、まずはこれまでに出版された邦訳情報を可能な限り網羅的に収集し、その一覧を作成することにした。その成果が、本稿の後半に示されている。

キーワード： シュタイナー シュタイナー全集 邦訳リスト

## 1 はじめに

本稿は、ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner, 1861～1925）の著作・講義等の邦訳の現状について調査し、報告するものである。

シュタイナーは基本的に執筆も講義もドイツ語で行っており、その多くはドイツ語のルドルフ・シュタイナー全集（Rudolf Steiner Gesamtausgabe, 以下「全集」）に収められている<sup>1</sup>。とはいえすべての著作・講義等が全集に収められているわけではない。そのため厳密に言えば、「シュタイナーの著作・講義等の邦訳」がそのまま「シュタイナー全集の邦訳」ということにはならない。

とはいえ両者はおおよそ等しいものと見なされており、シュタイナーの著作・講義等の出典を示す際には全集の番号を表記することが慣例化している。そのような状況を踏まえて、本稿のタイトルは「ルドルフ・シュタイナー全集 邦訳の現状」としている。後に掲げるリストの中には、一部に全集に含まれていないものが含まれているが、その点はご了承ください。

## 2 ルドルフ・シュタイナーについて

全集あるいは邦訳について触れる前に、ルドルフ・シュタイナーについて説明しておきたい。とはいえ、本稿はシュタイナーという人物について論じ

---

<sup>1</sup> 350巻に及ぶ。なお全集には芸術作品や講義の際の黒板絵なども含まれるが、本稿ではこれらには言及しない。

ること自体が目的ではないので、ごくごく簡潔な記述にとどめる。

シュタイナーは19世紀から20世紀にかけて活躍した思想家である。当時のオーストリア・ハンガリー帝国に生まれ、本格的な活動はウィーンに始まり、その後はドイツを拠点にし<sup>2</sup>、晩年はスイスを拠点にしている<sup>3</sup>。ヨーロッパ各地で講義を行ってはいるものの、活動の中心は一貫してドイツ語圏だったといつてよく、前述した通り、執筆も講義も基本的にはドイツ語だった。

活動の分野は多岐にわたっている。日本ではシュタイナー教育、あるいはシュタイナー学校として知られる教育の分野が比較的有名だが、その他にも哲学、医学、農業、社会、芸術など多くの分野で業績を残している。

### 3 全集について

前述の通りシュタイナーの著作・講義等の大半は、ドイツ語のルドルフ・シュタイナー全集に収められている。(全集の番号を示す際は「GA ○」という形で表記する<sup>4</sup>。)全体は大きく3つに分けられる……と説明されることも多いが、ここでは2つ(GA1～GA45 / GA51～GA354)に分けて説明をする。

この2つのグループは、「著書・論文等」と「講義等」であり、前者は「書いたもの」、後者は「話したもの」である。

著書・論文等 GA 1 ～ GA45

講義等 GA51 ～ GA354

巻数は上記の通りである。全集としては異常なほど巻数が多いのは、講義等が多いことが最大の理由となっている。

---

<sup>2</sup> はじめはヴァイマル(ワイマール)、その後はベルリンが主な拠点となっている。

<sup>3</sup> バーゼル近郊のドルナハが拠点。

<sup>4</sup> GAはGesamtausgabe(全集)から。

### 3.1 著書・論文等

当然のことながら、著書・論文等は公開を前提に執筆されており、シュタイナー自身が校正をしている<sup>5</sup>。(これに対し講義等は、後述するような問題を含んでいる。)シュタイナーの思想を知るための第一級の資料はこれらの著書・論文等だといってよい。

著書・論文等 (GA1～GA45) は、さらに3つに分けられる。

著書 GA1～GA28

論文 GA29～GA37

遺稿 GA38～GA45

分量や中身の体系的性から見ても、もっとも重要なのは著書ということになるが、分量として見ると全集の巻数の十分の一にも及ばない<sup>6</sup>。

### 3.2 講義等

分量的に見る限り、全集の大部分を占めるのは講義等である。比較的早い時期から、シュタイナーの講義には速記者が同席するようになり、講義が速記されている。こうして作られた速記録をベースに、参加者のノートなどを参照して復元されたのが、これらの講義等である。

資料としての最大の問題は、シュタイナー自身が校正を行っていない点である。そのためシュタイナー自身が、当初は公開を認めていなかったという事実がある。実際、一部ではあるが速記が欠けているものがある他、速記の間違いの可能性なども指摘されている。また講義の際に行われた板書が残っていないために<sup>7</sup>、理解が困難になっている箇所もある。

とはいえ分量は膨大なものであり、著作・論文等では触れていないさまざ

---

<sup>5</sup> 遺稿の一部には例外もある。

<sup>6</sup> 繰り返しになるが、そのため資料的価値にはやや問題があるというものの、講義の記録がシュタイナーの思想を知る上では欠かせない資料となっている。

<sup>7</sup> 多くの板書は、黒板に黒い紙を貼る形で行われ、その紙は保存されている。そのため多くの板書は講義と並んで保存されている。

まな事柄が語られている。そのため資料価値としてはやや問題があるものの、シュタイナーの思想を知る上では欠かせない資料となっている。

#### 4 邦訳について

著名な西洋の思想家であれば、全集（あるいは著作集）というまとまった形で邦訳が出版されていることが多い。ここでは業績全体を視野に収めた翻訳・出版の計画が立てられ、主要な訳語なども統一されている。

しかしシュタイナー関係の邦訳は、このようなこととはほとんど無縁になされてきた<sup>8</sup>。これが実現できない最大の理由は、巻数の膨大さだと推測される。誰が考えても、350巻もの翻訳をほぼ同時期に行うというのは至難の業であろう。

そのため翻訳はばらばらに行われてきた<sup>9</sup>。訳者もさまざま、出版社もさまざまであって、一部に例外はあるものの<sup>10</sup>互いに連絡や統一がとれているとは考えにくい。そのため現在では、全集のどの巻がすでに翻訳され、どの巻がまだ翻訳されていないかといったことすら、把握が困難な状況にある<sup>11</sup>。

これに加えて、状況を難しくしているさまざまな問題がある。その中のいくつかを指摘しておこう。

近年はほとんどなくなったものの、かつては出典を明示しない翻訳も少なくなかった。つまりシュタイナーの講義だということまではわかっても、全集の第何巻の翻訳かはもちろん、その講義のタイトルすら表記されていないことがあった<sup>12</sup>。そのため、二人の訳者が同じ講義を翻訳しているのに、別の邦訳タイトルがついているために別の講義として扱われる、といったこと

<sup>8</sup> 後述する人智学出版社の著作集がほとんど唯一の例外だと思われる。

<sup>9</sup> 同一の訳者・出版社が数冊のシリーズを発行したことはある。

<sup>10</sup> 一般論としていえば（例外はあるが）、同じ本の中ならともかく、本を超えた訳語の統一は基本的に期待できない。

<sup>11</sup> 巻数の膨大さがそれをいっそう困難にしていることは指摘するまでもない。

<sup>12</sup> 巻数の膨大さを考えると、内容からその巻を特定するというのは至難の業だといえる。

まで起っている。

また内容的に関連する講演を、さまざまな巻から選んで翻訳・編集をしたものも出版されている。そのような出版自体は大変興味深いものとなっているが、全集の1冊と翻訳の1冊が対応しないことになるわけで、全集との対応関係の把握はますます困難になっている。

このような状況を踏まえ、筆者は邦訳の現状を整理した形で示したいと考えている。具体的には、どの巻のどの講演が翻訳されており、その翻訳がどの本に収録されているのが容易にわかるようにしたい。本稿の執筆、およびそのための調査を行った最大の理由はここにある。とはいえ、これを一気に完遂することが非常に困難であることもまた事実である。

そこで全集との対応関係については今後の課題とし、まずはこれまでに出版された邦訳情報を可能な限り網羅的に収集し、その一覧を作成することにした。その成果が、本稿の後半に示されている。

#### 4.1 これまでの状況

シュタイナーの著作・講義等の邦訳を整理した形で示そうとするのは、本稿が初めてというわけではない。過去に行われたそのような試みをここで紹介しておきたい。

なお、シュタイナーの邦訳といえば1980年前後からとされるのが一般的な理解である。しかしそれ以前から、シュタイナーの思想は紹介されている<sup>13</sup>。

シュタイナーが活躍した時代は、日本の明治～大正の時代に相当する。要約のような形のものが多いが、一部に翻訳を含んでいるものがあるらしい。ただし今回の調査では、これらのものは対象としていない。

---

<sup>13</sup> このあたりの事情については河西善治「シュタイナーと日本」に詳しい。(ヨハネス・ヘルレーベン・河西善治『シュタイナー入門』ばる出版、2001所収。) また河西善治『「坊ちゃん」とシュタイナー』ばる出版、2000年には、シュタイナーの直弟子と推測される日本人のことが紹介されている。

#### 4.1.1 シュタイナー著作全集

1980 年前後からに限定した場合、非常に早い時期にシュタイナーの翻訳に尽力したといえるのが人智学出版社である。「シュタイナー著作全集」と銘打ち、10 数冊の邦訳を出版している<sup>14</sup>。

カバーには、対応するシュタイナー全集の巻数が数字で明記されている。このような巻数の表記は、筆者が知る限り、このシリーズ以外ではまったく行われていない。

#### 4.1.2 『シュタイナーを学ぶ本のカタログ』

2002 年に「ほんの木」という出版社から、『シュタイナーを学ぶ本のカタログ』が出版されている<sup>15</sup>。これはシュタイナー関係の本を紹介するもので、その頃までに出版されたシュタイナー関係の本の大半が取り上げられている。「伝記と入門書」「教育」「芸術」「思想」「社会」「自然科学」「その他」に分類され、一冊ずつ、比較的丁寧その内容が紹介されている。

ただしシュタイナーの著作・講義等に限られているわけではなく、シュタイナー教育の入門書・解説書など、「シュタイナー関係」の本を広く含むものになっている。また全集の巻数との対応は示されていない。

#### 4.1.3 『シュタイナー用語辞典』

同じ 2002 年に西川隆範の手による『シュタイナー用語辞典』が出版されている<sup>16</sup>。ここには付録の形で、比較的詳しい年譜などが収められている他、シュタイナー全集の巻数と書名が一覧の形で、日本語とドイツ語でそれぞれ示されている。しかも対応する邦訳がある場合には、その出版社名が記されている。これにより、およそ 20 年前の邦訳の状況はある程度まで把握が可

---

<sup>14</sup> 先に示したシュタイナー全集の説明の中の「著書」のみではなく、「論文等」も含まれている。

<sup>15</sup> ほんの木編『シュタイナーを学ぶ本のカタログ』ほんの木、2002。

<sup>16</sup> 西川隆範『シュタイナー用語辞典』風濤社、2002。



能である。これはシュタイナーの著作・講義等の邦訳の全体に目を向け、それを整理した形で示すことを目的とした、これまでで唯一の試みとみなしてよさそうである。

#### 4.1.4 本稿の意義

邦訳の現状を整理した形で示すという課題から見た際、最後に記した『シュタイナー用語辞典』の意義は非常に大きい。これを踏まえて本稿の意義を記すならば、次のようになるだろう。

シュタイナーの翻訳は、その後も続々と出版されている。後に示すように、2002年以降のものが半数を占めており<sup>17</sup>、それらは『シュタイナー用語辞典』には記載されていない。したがって現時点において（本稿の執筆は2020年9月）、そのような情報に満足するわけにはいかない。

またそこに記されているのは出版社名のみである。訳者名が記されていない上に、邦訳によって書名が異なる場合があることを考えると、記載されている情報は不十分と言わざるを得ない。

前述したように、内容的に関連する講演を、さまざまな巻から選んで翻訳をしたものも少なからず出版されているわけだが、そのようなものについては全集との対応関係が記されていない。本稿においても、今回は全集との対応関係を記すまでには至っていないのだが、次のステップとして、収録されている文書ごとに全集との対応を示す計画である。

#### 4.2 現在の概況

邦訳にもさまざまな形態がある。一般的な「本」という形態を取っているものが多いものの、近年は電子書籍という形態があり、またウェブサイト上に掲載されているものもある。また紀要の論文という形で発表されたものもある。

---

<sup>17</sup> 当然のことながら、古い本ほど入手は次第に困難になる。書店に並んでいる本に限定すれば、2002年以前のものはほとんどなく、大半は2002年以降に出版されている。

これらすべてについて統一した扱いをするのは困難であったため、随所でケースバイケースの対応をせざるをえなかったことを、お断りしておく。

#### 4.2.1 邦訳の数

本稿の後半に掲載した邦訳リストに並ぶ数は259である。これは基本的に「冊子単位」で数えたものである<sup>18</sup>。中身ではなく外見を基準にしていると言ってもよい。

出版社が変更になったり、一般の書籍から Kindle 版になったりするなど、版が大きく変更されたものはそれぞれ1として（1回の変更であれば合計2として）数えている<sup>19</sup>。単なる出版社の変更など、内容に大きな変更がないものをまとめて1つに数えるなら、200を少し上回る程度の数になると推定される。

なお同じ「1」であっても、それは連続講義の全体の翻訳の場合もあれば、その中の1講義の翻訳の場合もある。

#### 4.2.2 訳者の数

これも「冊子単位」で考え、各冊子を代表する訳者<sup>20</sup>を1名のみ数えた場合だが、その数は38になる。冊子内に収録されている個々の文書の訳者をすべて数え上げた場合、その数は50前後になると推定される。

訳者ごとの翻訳の数は西川隆範が圧倒的に多く、高橋巖がこれに次ぐ。

#### 4.2.3 出版社の数

出版社、あるいはそれに相当するものの数は、およそ30程度と見てよさ

---

<sup>18</sup> たとえば1つの本（冊子）に10の講義の邦訳が収められていても「1」と数えているということ。

<sup>19</sup> 新装版などは別には数えていない。

<sup>20</sup> 後半のリストで訳者名が「○○他」となっている場合、その「○○」が各冊子を代表する訳者である。

そうである。このうち出版を通常の業務としているもの<sup>21</sup>は、およそ20程度だと見られる<sup>22</sup>。

出版社ごとの翻訳の数はイザラ書房がもっとも多く、筑摩書房、風濤社などがこれに次ぐ。

#### 4.2.4 発行年ごとの数

発行年ごとの数は下の表のようになる。ここには、ウェブサイトに掲載されているものやKindle版のものは含めていない。

出版は1977年に始まる。年によって違いはあるものの、長期的な一定の傾向といったものは特に見いだせないように思われる。

1977年	2	1988年	3	1999年	1	2010年	9
1978年	3	1989年	6	2000年	6	2011年	7
1979年	2	1990年	1	2001年	6	2012年	3
1980年	2	1991年	8	2002年	4	2013年	4
1981年	8	1992年	9	2003年	10	2014年	5
1982年	5	1993年	6	2004年	12	2015年	1
1983年	2	1994年	4	2005年	7	2016年	3
1984年	2	1995年	5	2006年	4	2017年	6
1985年	6	1996年	5	2007年	5	2018年	2
1986年	11	1997年	3	2008年	6	2019年	4
1987年	3	1998年	5	2009年	10	2020年	3

<sup>21</sup> 社会的な意味で「正式な出版社」と見なされているもののこと。

<sup>22</sup> 途中で社名が変更になった「書肆風の薔薇」と「水声社」はあわせて「1」とする。また後半のリストでは「筑摩書房」「ちくま学芸文庫」「ちくま文庫」と表記しているが、これらもあわせて「1」とする。紀要に掲載された論文は含めない。

## 5 邦訳リスト

利用しやすさを考慮し、【訳者別】と【出版社別】の2種類を掲載する。

【訳者別】：訳者名の五十音順。同じ訳者の場合は発行年順。

【出版社別】：出版社名の五十音順。同じ出版社の場合は発行年順。

- ・ 訳者が複数の場合、最初の1名のみを表記する。
- ・ Kindle版は出版社を表示せず、Kindleとする。
- ・ Kindle版とウェブサイトの発行年は空欄とする。
- ・ 出版社の変更などの場合は別の本として扱う。(本文を参照。)
- ・ 一部に省略・短縮した語がある。ご容赦願いたい。

リスト内の注(【訳者別】【出版社別】共通)

- \*1『ルドルフ・シュタイナー研究』には翻訳以外の文書(解説など)も収められているが、邦訳書として扱う。
- \*2 正しくは「ちくま学芸文庫」。
- \*3 1992年に社名が変更されている。それ以前は「書肆風の薔薇」。
- \*4 正しくは「日本アントロポゾフィー協会/ルドルフ・シュタイナーハウス事務局」。
- \*5 正しくは「シュタイナー研究室」(<http://www.bekkoame.ne.jp/~topos/steiner/Steiner.html>)。
- \*6 問合せ先はヤーデ・イニシアティブ (<http://jade-initiative.net/>)。
- \*7 正しくは「ルドルフ・シュタイナー研究所」。
- \*8 紀要に収録された論文であり、論文名を書名として扱う。  
『大阪成蹊短期大学研究紀要』第11号所収。
- \*9 紀要に収録された論文であり、論文名を書名として扱う。  
『大阪成蹊大学紀要 教育学部篇』1所収。

\*10 邦訳以外の部分を多く含むが、邦訳書として扱う。

【シュタイナー邦訳リスト1 訳者別】

訳者	書名	出版社	発行年
上松佑二	新しい建築様式への道	相模書房	1977
浅田豊	個人と人類を導く霊の働き	松村書館	1984
浅田豊	ゲーテ的世界観の認識論要綱	筑摩書房	1991
浅田豊	個人と人類を導く霊のはたらき	涼風書林	2010
浅田豊	ルドルフ・シュタイナー 二つのメモランダム(覚書き)	涼風書林	2019
浅田豊他	アントロポゾフィー医学の本質	水声社	2013
石井良	神秘的事実としてのキリスト教と古代密儀	人智学出版社	1981
石井良他	神秘学概論	人智学出版社	1982
石川公子他	私たちの中の目に見えない人間	涼風書林	2011
石川公子他	オイリュトミー療法	涼風書林	2014
一叶知秋	真理と学問	シュタ研 *5	
市村温治	マルコ伝	人智学出版社	1981
市村温治	マルコ伝	みくに出版	2020
市村温治	マルコ伝	Kindle	
井藤元	シュタイナー, R. 「ゲーテの黙示 ゲーテ生誕 150 周年のために」 *8	*8	2004
井藤元	R. シュタイナー 『『ファウスト』によって開示されたゲーテの精神様式』 *9	*9	2014
伊藤勉他	シュタイナー自伝 I	人智学出版社	1982
伊藤勉他	シュタイナー自伝 II	人智学出版社	1982
伊藤勉他	シュタイナー自伝 I	ばる出版	2001
伊藤勉他	シュタイナー自伝 II	ばる出版	2001
今井重孝	社会問題としての教育問題	イザラ書房	2017
入間カイ	シュタイナーが協会と自由大学に託したこと	水声社	2014
大西そよ子	精神科学の立場から見た子供の教育	人智学出版社	1980

大西そよ子	精神科学の立場から見た子供の教育	みくに出版	2009
大西そよ子	精神科学の立場から見た子供の教育	Kindle	
香川裕子	神秘劇 [第3劇・第4劇]	未公刊 *6	
熊坂春樹	健康と病気について	ホメオパシー 出版	2004
興石祥三	主の祈り	涼風書林	2007
坂野雄二他	教育術	みすず書房	1986
佐々木正昭	現代の教育はどうあるべきか	人智学出版社	1985
佐々木義之	真相から見た宇宙の進化	シュタ研 *5	
佐々木義之	ゲーテの自然科学論序説	シュタ研 *5	
佐々木義之	霊的世界の入口	シュタ研 *5	
佐々木義之	魂生活の変容	シュタ研 *5	
佐々木義之	霊的ヒエラルキーとその物質界における反映	シュタ研 *5	
佐々木義之	精神的な探究における真実の道と偽りの道	シュタ研 *5	
佐々木義之	人智学的共同体形成	シュタ研 *5	
佐々木義之他	四次元	シュタ研 *5	
佐藤俊夫 (1)	牧会医学講座 医師と教会者の共働	ルネッサンス・ アイ	2014
佐藤俊夫 (1)	アントロポゾフィーの人間認識と医学	ルネッサンス・ アイ	2015
佐藤俊夫 (1)	医療を深めるための瞑想的考察と指導	ルネッサンス・ アイ	2017
佐藤俊夫 (1)	霊学に基づく生理学と治療学	ルネッサンス・ アイ	2019
佐藤俊夫 (2)	自己認識への道	人智学出版社	1981
鈴木一博	聖き夜との考えとわたしなる秘密	アントロ *4	1992
鈴木一博	テオゾフィー	アントロ *4	1998
鈴木一博	いかにして人が高い世を知るにいたるか	榛書房	2008
鈴木一博	メディテーションをもつてものにする人間学	榛書房	2009
鈴木一博	普遍人間学	榛書房	2013
鈴木一博	自由の哲学	榛書房	2016
鈴木一博	メディテーションをもつてものにする人間学	Kindle	

高橋巖	神智学	イザラ書房	1977
高橋巖	アカシヤ年代記より	国書刊行会	1981
高橋巖	血はまったく特製のジュースだ	イザラ書房	1983
高橋巖	アカシヤ年代記より	国書刊行会	1984
高橋巖	ルドルフ・シュタイナーによる魂のこよみ	イザラ書房	1985
高橋巖	教育の基礎としての一般人間学	創林社	1985
高橋巖	教育芸術 I	創林社	1985
高橋巖	色彩の本質	イザラ書房	1986
高橋巖	教育芸術 II	創林社	1986
高橋巖	治療教育講義	角川書店	1988
高橋巖	オイリュトミー芸術	イザラ書房	1988
高橋巖	社会の未来	イザラ書房	1989
高橋巖	死後の生活	イザラ書房	1989
高橋巖	教育の基礎としての一般人間学	筑摩書房	1989
高橋巖	教育芸術 I	筑摩書房	1989
高橋巖	教育芸術 II	筑摩書房	1989
高橋巖	現代と未来を生きるのに必要な社会問題の核心	イザラ書房	1991
高橋巖	カルマの開示	春秋社	1996
高橋巖	十四歳からのシュタイナー教育	イザラ書房	1997
高橋巖	神殿伝説と黄金伝説	国書刊行会	1997
高橋巖	シュタイナー ヨハネ福音書講義	春秋社	1997
高橋巖	シュタイナー 霊的宇宙論	春秋社	1998
高橋巖	神秘学概論	学芸文庫 *2	1998
高橋巖	神智学	学芸文庫 *2	2000
高橋巖	いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか	学芸文庫 *2	2001
高橋巖	自由の哲学	学芸文庫 *2	2002
高橋巖	内面への旅 (シュタイナーコレクション 2)	筑摩書房	2003
高橋巖	神々との出会い (シュタイナーコレクション 4)	筑摩書房	2003

高橋巖	子どもの教育（シュタイナーコレクション1）	筑摩書房	2003
高橋巖	照応する宇宙（シュタイナーコレクション3）	筑摩書房	2003
高橋巖	オカルト生理学	学芸文庫 *2	2004
高橋巖	芸術の贈りもの（シュタイナーコレクション7）	筑摩書房	2004
高橋巖	歴史を生きる（シュタイナーコレクション6）	筑摩書房	2004
高橋巖	イエスを語る（シュタイナーコレクション5）	筑摩書房	2004
高橋巖	魂のこよみ	ちくま文庫	2004
高橋巖	シュタイナー 宇宙的人間論	春秋社	2005
高橋巖	治療教育講義	学芸文庫 *2	2005
高橋巖	シュタイナーの死者の書	学芸文庫 *2	2006
高橋巖	人智学・心智学・霊智学	学芸文庫 *2	2007
高橋巖	社会の未来	春秋社	2009
高橋巖	シュタイナー 社会問題の核心	春秋社	2010
高橋巖	魂について	春秋社	2011
高橋巖	死について	春秋社	2011
高橋巖	悪について	春秋社	2012
高橋巖	シュタイナーの言葉	春秋社	2014
高橋巖	ニーチェ みずからの時代と闘う者	岩波文庫	2016
高橋巖	シュタイナー 根源的靈性論 バガヴァッド・ギーターとパウロの書簡	春秋社	2017
高橋巖	ルドルフ・シュタイナー 秘教講義1	春秋社	2018
高橋巖	ルドルフ・シュタイナー 秘教講義2	春秋社	2018
高橋巖	シュタイナーの瞑想法（秘教講義3）	春秋社	2019
高橋巖	シュタイナーの瞑想・修行論（秘教講義4）	春秋社	2019
高橋巖	バガヴァッド・ギーターの眼に見えぬ基盤	春秋社	2020
高橋巖	神秘学概論	Kindle	
高橋巖	神智学	Kindle	
高橋巖	いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか	Kindle	
高橋巖	自由の哲学	Kindle	



高橋弘子	メルヘン論	水声社 *3	1990
鳥山雅代	『魂の暦』とともに *10	水声社	2006
中村正明	医学は霊学から何を学ぶことができるか	水声社	2006
西川隆範	仏陀からキリストへ	水声社 *3	1985
西川隆範	薔薇十字会の神智学	平河出版社	1985
西川隆範	第五福音書	イザラ書房	1986
西川隆範	霊界の境域	水声社 *3	1986
西川隆範	世界史の秘密	創林社	1986
西川隆範	秘儀参入の道	平河出版社	1986
西川隆範	西洋の光の中の東洋	創林社	1987
西川隆範	芸術と美学	平河出版社	1987
西川隆範	輪廻転生とカルマ	水声社 *3	1988
西川隆範	四季の宇宙的イマジネーション	水声社 *3	1988
西川隆範	神秘主義と現代の世界観	水声社 *3	1989
西川隆範	ルカ福音書講義	イザラ書房	1991
西川隆範	神智学の門前にて	イザラ書房	1991
西川隆範	シュタイナーの宇宙進化論 *10	イザラ書房	1991
西川隆範	創世記の秘密	水声社 *3	1991
西川隆範	黙示録の秘密	水声社 *3	1991
西川隆範	釈迦・観音・弥勒とは誰か	水声社 *3	1991
西川隆範	病気と治療	イザラ書房	1992
西川隆範	健康と食事	イザラ書房	1992
西川隆範	神秘学概論	イザラ書房	1992
西川隆範	民族魂の使命	イザラ書房	1992
西川隆範	シュタイナー教育小事典：子ども編	イザラ書房	1992
西川隆範	人智学指導原則	水声社 *3	1992
西川隆範	世界史の秘密	水声社	1992
西川隆範	西洋の光の中の東洋	水声社	1992
西川隆範	音楽の本質と人間の音体験	イザラ書房	1993

西川隆範	いかにして前世を認識するか(カルマ論集成1)	イザラ書房	1993
西川隆範	カルマの開示(カルマ論集成2)	イザラ書房	1993
西川隆範	瞑想と祈りの言葉	イザラ書房	1993
西川隆範	泉の不思議	イザラ書房	1993
西川隆範	霊視と霊聴	水声社	1993
西川隆範	シュタイナー教育の基本要素	イザラ書房	1994
西川隆範	シュタイナー教育の実践	イザラ書房	1994
西川隆範	カルマの形成(カルマ論集成3)	イザラ書房	1994
西川隆範	歴史の中のカルマ的関連(カルマ論集成4)	イザラ書房	1994
西川隆範	シュタイナー 心理学講義	平河出版社	1995
西川隆範	宇宙のカルマ(カルマ論集成5)	イザラ書房	1996
西川隆範	秘儀の歴史	国書刊行会	1996
西川隆範	人間理解からの教育	筑摩書房	1996
西川隆範	シュタイナー 経済学講座	筑摩書房	1998
西川隆範	精神科学から見た死後の生	風濤社	2000
西川隆範	天使たち妖精たち	風濤社	2000
西川隆範	人間の四つの気質	風濤社	2000
西川隆範	星と人間	風濤社	2001
西川隆範	色と形と音の瞑想	風濤社	2001
西川隆範	シュタイナー 仏教論集	アルテ	2002
西川隆範	あたまを育てる からだを育てる	風濤社	2002
西川隆範	神秘的事実としてのキリスト教と古代の密儀	アルテ	2003
西川隆範	イエスからキリストへ	アルテ	2003
西川隆範	人智学から見た家庭の医学	風濤社	2003
西川隆範	人体と宇宙のリズム	風濤社	2003
西川隆範	教育の方法	アルテ	2004
西川隆範	子どもの健全な成長	アルテ	2004
西川隆範	自然と人間の生活	風濤社	2004
西川隆範	こころの不思議	風濤社	2004

西川隆範	エーテル界へのキリストの出現	アルテ	2005
西川隆範	精神科学による教育の改新	アルテ	2005
西川隆範	色彩の本質・色彩の秘密	イザラ書房	2005
西川隆範	身体と心が求める栄養学	風濤社	2005
西川隆範	シュタイナーの美しい生活	風濤社	2005
西川隆範	聖杯の探求	イザラ書房	2006
西川隆範	シュタイナー マルコ福音書講義	アルテ	2007
西川隆範	ベーシック・シュタイナー	イザラ書房	2007
西川隆範	シュタイナー教育ハンドブック	風濤社	2007
西川隆範	ニーチェー同時代への闘争者	アルテ	2008
西川隆範	シュタイナー自伝(上)	アルテ	2008
西川隆範	シュタイナー自伝(下)	アルテ	2008
西川隆範	職業のカルマと未来	風濤社	2008
西川隆範	いかにして前世を認識するか(カルマ論集成1+2)	イザラ書房	2008
西川隆範	ゲーテ 精神世界の先駆者	アルテ	2009
西川隆範	シュタイナー 世直し問答	風濤社	2009
西川隆範	地球年代記	風濤社	2009
西川隆範	輪廻転生譚	風濤社	2009
西川隆範	シュタイナー 哲学講義	アルテ	2010
西川隆範	シュタイナー キリスト論集	アルテ	2010
西川隆範	〈からだの不思議〉を語る	イザラ書房	2010
西川隆範	シュタイナー 経済学講座	学芸文庫*2	2010
西川隆範	天国と地獄	風濤社	2010
西川隆範	神仏と人間	風濤社	2010
西川隆範	シュタイナー 文学講義	アルテ	2011
西川隆範	シュタイナーはこう語った	アルテ	2011
西川隆範	社会改革案	水声社	2011
西川隆範	天地の未来	風濤社	2011
西川隆範	シュタイナー 古代秘教講義	アルテ	2012

西川隆範	黙示録的な現代	風濤社	2012
西川隆範	人間理解からの教育	学芸文庫 *2	2013
西川隆範	シュタイナー マルコ福音書講義	Kindle	
西川隆範	シュタイナー 古代秘教講義	Kindle	
西川隆範	シュタイナー 仏教論集	Kindle	
西川隆範	イエスからキリストへ	Kindle	
西川隆範	神秘的事実としてのキリスト教と古代の密儀	Kindle	
西川隆範	エーテル界へのキリストの出現	Kindle	
西川隆範	シュタイナー キリスト論集	Kindle	
新田義之	教育の基礎としての一般人間学	人智学出版社	1980
新田義之	オックスフォード教育講座	人智学出版社	1981
新田義之	神秘劇 [第1劇・第2劇]	人智学出版社	1982
新田義之	いかにカルマは作用するか	人智学出版社	1986
新田義之	教育と芸術	人智学出版社	1986
新田義之	オックスフォード教育講座	イザラ書房	2002
新田義之	教育の基礎となる一般人間学	イザラ書房	2003
新田義之	いかにカルマは作用するか	みくに出版	2009
新田義之	いかにカルマは作用するか	Kindle	
新田義之他	ルドルフ・シュタイナー研究 創刊号 *1	ルドルフ研 *7	1978
新田義之他	ルドルフ・シュタイナー研究 第2号 *1	ルドルフ研 *7	1978
新田義之他	ルドルフ・シュタイナー研究 第3号 *1	ルドルフ研 *7	1979
新田義之他	ルドルフ・シュタイナー研究 第4号 *1	ルドルフ研 *7	1979
新田義之他	メールヒェン・「緑の蛇と百合姫のメールヒェン」に開示されたゲーテの精神	人智学出版社	1983
新田義之他	人智学・神秘主義・仏教	人智学出版社	1986
新田義之他	精神科学と社会問題	人智学出版社	1986
新田義之他	農業講座	人智学出版社	1987
新田義之他	農業講座	イザラ書房	2000
新田義之他	人智学・神秘主義・仏教	みくに出版	2009
新田義之他	精神科学と社会問題	みくに出版	2010

新田義之他	精神科学と社会問題	Kindle	
新田義之他	人智学・神秘主義・仏教	Kindle	
秦理恵子	魂のこよみ	イザラ書房	2003
樋口純明	ニーチェー同時代との闘争者ー	人智学出版社	1981
廣嶋準訓	社会問題の核心	人智学出版社	1981
深澤英隆	アーカーシャ年代記より	人智学出版社	1978
深澤英隆	アーカーシャ年代記より [改訳]	人智学出版社	1982
藤本佳志	神秘学概論	本の研究社	2017
藤本佳志	カルマの現われ	本の研究社	2017
藤本佳志	人間と人類への霊的導き	本の研究社	2020
本間英世	自由の哲学	人智学出版社	1981
松浦賢	天使と人間	イザラ書房	1995
松浦賢	悪の秘儀	イザラ書房	1995
松浦賢	シュタイナー先生、こどもに語る	イザラ書房	1996
松浦賢	霊学の観点からの子どもの教育	イザラ書房	1999
松浦賢	テオゾフィー 神智学	柏書房	2000
松浦賢	いかにして高次の世界を認識するか	柏書房	2001
松山由紀	見える歌としてのオイリュトミー	涼風書林	2009
溝井高志	ゲーテの世界観	晃洋書房	1995
冥王まさ子他	魂の隠れた深み	河出書房新社	1995
森章吾	秘されたる人体生理	イザラ書房	2013
森章吾	ゲーテ的世界観の認識論要綱	イザラ書房	2016
森章吾	自由の哲学	イザラ書房	2017
森章吾	農業講座	Kindle	
森章吾	教育の基礎としての一般人間学	Kindle	
森章吾	神智学	Kindle	
森章吾	神秘学概論	Kindle	
山田明紀	哲学の謎	水声社	2004
yucca	精神科学と医学	シュタ研 *5	
yucca	神秘学の記号と象徴	シュタ研 *5	

yucca	四つの福音書のキリスト叙述における四つの異なった視点	シュタ研 *5	
yucca	バガヴァット・ギターとパウロ書簡	シュタ研 *5	
yucca	キリスト衝動の告知者としてのノヴァーリス	シュタ研 *5	
yucca	創造し、造形し、形成する宇宙言語の協和音としての人間	シュタ研 *5	
yucca	人智学の光に照らした世界史	シュタ研 *5	
yucca	内的靈的衝動の写しとしての美術史	シュタ研 *5	
yucca	治療のための精神科学的観点	シュタ研 *5	

【シュタイナー邦訳リスト2 出版社別】

出版社	書名	訳者	発行年
アルテ	シュタイナー 仏教論集	西川隆範	2002
アルテ	神秘的事実としてのキリスト教と古代の密儀	西川隆範	2003
アルテ	イエスからキリストへ	西川隆範	2003
アルテ	教育の方法	西川隆範	2004
アルテ	子どもの健全な成長	西川隆範	2004
アルテ	エーテル界へのキリストの出現	西川隆範	2005
アルテ	精神科学による教育の改新	西川隆範	2005
アルテ	シュタイナー マルコ福音書講義	西川隆範	2007
アルテ	ニーチェー同時代への闘争者	西川隆範	2008
アルテ	シュタイナー自伝（上）	西川隆範	2008
アルテ	シュタイナー自伝（下）	西川隆範	2008
アルテ	ゲーテ 精神世界の先駆者	西川隆範	2009
アルテ	シュタイナー 哲学講義	西川隆範	2010
アルテ	シュタイナー キリスト論集	西川隆範	2010
アルテ	シュタイナー 文学講義	西川隆範	2011
アルテ	シュタイナーはこう語った	西川隆範	2011
アルテ	シュタイナー 古代秘教講義	西川隆範	2012
イザラ書房	神智学	高橋巖	1977

イザラ書房	血はまったく特製のジュースだ	高橋巖	1983
イザラ書房	ルドルフ・シュタイナーによる魂のこよみ	高橋巖	1985
イザラ書房	色彩の本質	高橋巖	1986
イザラ書房	第五福音書	西川隆範	1986
イザラ書房	オイリュトミー芸術	高橋巖	1988
イザラ書房	社会の未来	高橋巖	1989
イザラ書房	死後の生活	高橋巖	1989
イザラ書房	現代と未来を生きるのに必要な社会問題の核心	高橋巖	1991
イザラ書房	ルカ福音書講義	西川隆範	1991
イザラ書房	神智学の門前にて	西川隆範	1991
イザラ書房	シュタイナーの宇宙進化論 *10	西川隆範	1991
イザラ書房	病気と治療	西川隆範	1992
イザラ書房	健康と食事	西川隆範	1992
イザラ書房	神秘学概論	西川隆範	1992
イザラ書房	民族魂の使命	西川隆範	1992
イザラ書房	シュタイナー教育小事典：子ども編	西川隆範	1992
イザラ書房	音楽の本質と人間の音体験	西川隆範	1993
イザラ書房	いかにして前世を認識するか（カルマ論集成1）	西川隆範	1993
イザラ書房	カルマの開示（カルマ論集成2）	西川隆範	1993
イザラ書房	瞑想と祈りの言葉	西川隆範	1993
イザラ書房	泉の不思議	西川隆範	1993
イザラ書房	シュタイナー教育の基本要素	西川隆範	1994
イザラ書房	シュタイナー教育の実践	西川隆範	1994
イザラ書房	カルマの形成（カルマ論集成3）	西川隆範	1994
イザラ書房	歴史の中のカルマ的関連（カルマ論集成4）	西川隆範	1994
イザラ書房	天使と人間	松浦賢	1995
イザラ書房	悪の秘儀	松浦賢	1995
イザラ書房	宇宙のカルマ（カルマ論集成5）	西川隆範	1996

イザラ書房	シュタイナー先生、こどもに語る	松浦賢	1996
イザラ書房	十四歳からのシュタイナー教育	高橋巖	1997
イザラ書房	霊学の観点からの子どもの教育	松浦賢	1999
イザラ書房	農業講座	新田義之他	2000
イザラ書房	オックスフォード教育講座	新田義之	2002
イザラ書房	教育の基礎となる一般人間学	新田義之	2003
イザラ書房	魂のこよみ	秦理恵子	2003
イザラ書房	色彩の本質・色彩の秘密	西川隆範	2005
イザラ書房	聖杯の探求	西川隆範	2006
イザラ書房	ベーシック・シュタイナー	西川隆範	2007
イザラ書房	いかにして前世を認識するか（カルマ論集成1+2）	西川隆範	2008
イザラ書房	〈からだの不思議〉を語る	西川隆範	2010
イザラ書房	秘されたる人体生理	森章吾	2013
イザラ書房	ゲーテ的世界観の認識論要綱	森章吾	2016
イザラ書房	社会問題としての教育問題	今井重孝	2017
イザラ書房	自由の哲学	森章吾	2017
岩波文庫	ニーチェ みずからの時代と闘う者	高橋巖	2016
柏書房	テオゾフィー 神智学	松浦賢	2000
柏書房	いかにして高次の世界を認識するか	松浦賢	2001
角川書店	治療教育講義	高橋巖	1988
河出書房新社	魂の隠れた深み	冥王まさ子他	1995
晃洋書房	ゲーテの世界観	溝井高志	1995
国書刊行会	アカシャ年代記より	高橋巖	1981
国書刊行会	アカシャ年代記より	高橋巖	1984
国書刊行会	秘儀の歴史	西川隆範	1996
国書刊行会	神殿伝説と黄金伝説	高橋巖	1997
相模書房	新しい建築様式への道	上松佑二	1977
シュタ研*5	真理と学問	一叶知秋	
シュタ研*5	真相から見た宇宙の進化	佐々木義之	



シュタ研 *5	ゲーテの自然科学論序説	佐々木義之	
シュタ研 *5	霊的世界の入口	佐々木義之	
シュタ研 *5	魂生活の変容	佐々木義之	
シュタ研 *5	霊的ヒエラルキーとその物質界における反映	佐々木義之	
シュタ研 *5	精神的な探究における真実の道と偽りの道	佐々木義之	
シュタ研 *5	人智学的共同体形成	佐々木義之	
シュタ研 *5	四次元	佐々木義之他	
シュタ研 *5	精神科学と医学	yucca	
シュタ研 *5	神秘学の記号と象徴	yucca	
シュタ研 *5	四つの福音書のキリスト叙述における四つの異なった視点	yucca	
シュタ研 *5	バガヴァット・ギーターとパウロ書簡	yucca	
シュタ研 *5	キリスト衝動の告知者としてのノヴァーリス	yucca	
シュタ研 *5	創造し、造形し、形成する宇宙言語の協和音としての人間	yucca	
シュタ研 *5	人智学の光に照らした世界史	yucca	
シュタ研 *5	内的霊的衝動の写しとしての美術史	yucca	
シュタ研 *5	治療のための精神科学的観点	yucca	
春秋社	カルマの開示	高橋巖	1996
春秋社	シュタイナー ヨハネ福音書講義	高橋巖	1997
春秋社	シュタイナー 霊的宇宙論	高橋巖	1998
春秋社	シュタイナー 宇宙的人間論	高橋巖	2005
春秋社	社会の未来	高橋巖	2009
春秋社	シュタイナー 社会問題の核心	高橋巖	2010
春秋社	魂について	高橋巖	2011
春秋社	死について	高橋巖	2011
春秋社	悪について	高橋巖	2012
春秋社	シュタイナーの言葉	高橋巖	2014
春秋社	シュタイナー 根源的霊性論 バガヴァット・ギーターとパウロの書簡	高橋巖	2017
春秋社	ルドルフ・シュタイナー 秘教講義 1	高橋巖	2018

春秋社	ルドルフ・シュタイナー 秘教講義 2	高橋巖	2018
春秋社	シュタイナーの瞑想法（秘教講義 3）	高橋巖	2019
春秋社	シュタイナーの瞑想・修行論（秘教講義 4）	高橋巖	2019
春秋社	バガヴァッド・ギーターの眼に見えぬ基盤	高橋巖	2020
人智学出版社	アーカーシャ年代記より	深澤英隆	1978
人智学出版社	精神科学の立場から見た子供の教育	大西そよ子	1980
人智学出版社	教育の基礎としての一般人間学	新田義之	1980
人智学出版社	神秘的事実としてのキリスト教と古代密儀	石井良	1981
人智学出版社	マルコ伝	市村温治	1981
人智学出版社	社会問題の核心	廣嶋準訓	1981
人智学出版社	自己認識への道	佐藤俊夫 (2)	1981
人智学出版社	オックスフォード教育講座	新田義之	1981
人智学出版社	ニーチェー同時代との闘争者ー	樋口純明	1981
人智学出版社	自由の哲学	本間英世	1981
人智学出版社	神秘学概論	石井良他	1982
人智学出版社	シュタイナー自伝 I	伊藤勉他	1982
人智学出版社	シュタイナー自伝 II	伊藤勉他	1982
人智学出版社	神秘劇 〔第 1 劇・第 2 劇〕	新田義之	1982
人智学出版社	アーカーシャ年代記より 〔改訳〕	深澤英隆	1982
人智学出版社	メールヒェン・「緑の蛇と百合姫のメールヒェン」に開示されたゲーテの精神	新田義之他	1983
人智学出版社	現代の教育はどうあるべきか	佐々木正昭	1985
人智学出版社	いかにカルマは作用するか	新田義之	1986
人智学出版社	教育と芸術	新田義之	1986
人智学出版社	人智学・神秘主義・仏教	新田義之他	1986
人智学出版社	精神科学と社会問題	新田義之他	1986
人智学出版社	農業講座	新田義之他	1987
水声社 *3	仏陀からキリストへ	西川隆範	1985
水声社 *3	霊界の境域	西川隆範	1986
水声社 *3	輪廻転生とカルマ	西川隆範	1988

水声社 *3	四季の宇宙的イマジネーション	西川隆範	1988
水声社 *3	神秘主義と現代の世界観	西川隆範	1989
水声社 *3	メルヘン論	高橋弘子	1990
水声社 *3	創世記の秘密	西川隆範	1991
水声社 *3	黙示録の秘密	西川隆範	1991
水声社 *3	釈迦・観音・弥勒とは誰か	西川隆範	1991
水声社 *3	人智学指導原則	西川隆範	1992
水声社	世界史の秘密	西川隆範	1992
水声社	西洋の光の中の東洋	西川隆範	1992
水声社	霊視と霊聴	西川隆範	1993
水声社	哲学の謎	山田明紀	2004
水声社	医学は霊学から何を学ぶことができるか	中村正明	2006
水声社	『魂の暦』とともに *10	鳥山雅代	2006
水声社	社会改革案	西川隆範	2011
水声社	アントロポゾフィー医学の本質	浅田豊他	2013
水声社	シュタイナーが協会と自由大学に託したこと	入間カイ	2014
創林社	教育の基礎としての一般人間学	高橋巖	1985
創林社	教育芸術 I	高橋巖	1985
創林社	教育芸術 II	高橋巖	1986
創林社	世界史の秘密	西川隆範	1986
創林社	西洋の光の中の東洋	西川隆範	1987
学芸文庫 *2	神秘学概論	高橋巖	1998
学芸文庫 *2	神智学	高橋巖	2000
学芸文庫 *2	いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか	高橋巖	2001
学芸文庫 *2	自由の哲学	高橋巖	2002
学芸文庫 *2	オカルト生理学	高橋巖	2004
学芸文庫 *2	治療教育講義	高橋巖	2005
学芸文庫 *2	シュタイナーの死者の書	高橋巖	2006
学芸文庫 *2	人智学・心智学・霊智学	高橋巖	2007
学芸文庫 *2	シュタイナー 経済学講座	西川隆範	2010

学芸文庫 *2	人間理解からの教育	西川隆範	2013
筑摩書房	教育の基礎としての一般人間学	高橋巖	1989
筑摩書房	教育芸術 I	高橋巖	1989
筑摩書房	教育芸術 II	高橋巖	1989
筑摩書房	ゲーテ的世界観の認識論要綱	浅田豊	1991
筑摩書房	人間理解からの教育	西川隆範	1996
筑摩書房	シュタイナー 経済学講座	西川隆範	1998
筑摩書房	内面への旅 (シュタイナーコレクション 2)	高橋巖	2003
筑摩書房	神々との出会い (シュタイナーコレクション 4)	高橋巖	2003
筑摩書房	子どもの教育 (シュタイナーコレクション 1)	高橋巖	2003
筑摩書房	照応する宇宙 (シュタイナーコレクション 3)	高橋巖	2003
筑摩書房	芸術の贈りもの (シュタイナーコレクション 7)	高橋巖	2004
筑摩書房	歴史を生きる (シュタイナーコレクション 6)	高橋巖	2004
筑摩書房	イエスを語る (シュタイナーコレクション 5)	高橋巖	2004
ちくま文庫	魂のこよみ	高橋巖	2004
日本アントロ *4	聖き夜との考えとわたしなる秘密	鈴木一博	1992
日本アントロ *4	テオゾフィー	鈴木一博	1998
ばる出版	シュタイナー自伝 I	伊藤勉他	2001
ばる出版	シュタイナー自伝 II	伊藤勉他	2001
榛書房	いかにして人が高い世を知るにいたるか	鈴木一博	2008
榛書房	メディテーションをもつてものにする人間学	鈴木一博	2009
榛書房	普遍人間学	鈴木一博	2013
榛書房	自由の哲学	鈴木一博	2016
平河出版社	薔薇十字会の神智学	西川隆範	1985
平河出版社	秘儀参入の道	西川隆範	1986
平河出版社	芸術と美学	西川隆範	1987
平河出版社	シュタイナー 心理学講義	西川隆範	1995

風濤社	精神科学から見た死後の生	西川隆範	2000
風濤社	天使たち妖精たち	西川隆範	2000
風濤社	人間の四つの気質	西川隆範	2000
風濤社	星と人間	西川隆範	2001
風濤社	色と形と音の瞑想	西川隆範	2001
風濤社	あたまを育てる からだを育てる	西川隆範	2002
風濤社	人智学から見た家庭の医学	西川隆範	2003
風濤社	人体と宇宙のリズム	西川隆範	2003
風濤社	自然と人間の生活	西川隆範	2004
風濤社	こころの不思議	西川隆範	2004
風濤社	身体と心が求める栄養学	西川隆範	2005
風濤社	シュタイナーの美しい生活	西川隆範	2005
風濤社	シュタイナー教育ハンドブック	西川隆範	2007
風濤社	職業のカルマと未来	西川隆範	2008
風濤社	シュタイナー 世直し問答	西川隆範	2009
風濤社	地球年代記	西川隆範	2009
風濤社	輪廻転生譚	西川隆範	2009
風濤社	天国と地獄	西川隆範	2010
風濤社	神仏と人間	西川隆範	2010
風濤社	天地の未来	西川隆範	2011
風濤社	黙示録的な現代	西川隆範	2012
ホメオパシー 出版	健康と病気について	熊坂春樹	2004
本の研究社	神秘学概論	藤本佳志	2017
本の研究社	カルマの現われ	藤本佳志	2017
本の研究社	人間と人類への霊的導き	藤本佳志	2020
みくに出版	精神科学の立場から見た子供の教育	大西そよ子	2009
みくに出版	いかにカルマは作用するか	新田義之	2009
みくに出版	人智学・神秘主義・仏教	新田義之他	2009
みくに出版	精神科学と社会問題	新田義之他	2010

みくに出版	マルコ伝	市村温治	2020
みすず書房	教育術	坂野雄二他	1986
松村書館	個人と人類を導く霊の働き	浅田豊	1984
涼風書林	主の祈り	興石祥三	2007
涼風書林	見える歌としてのオイリュトミー	松山由紀	2009
涼風書林	個人と人類を導く霊のはたらき	浅田豊	2010
涼風書林	私たちの中の目に見えない人間	石川公子他	2011
涼風書林	オイリュトミー療法	石川公子他	2014
涼風書林	ルドルフ・シュタイナー 二つのメモランダム (覚書き)	浅田豊	2019
ルドルフ研*7	ルドルフ・シュタイナー研究 創刊号*1	新田義之他	1978
ルドルフ研*7	ルドルフ・シュタイナー研究 第2号*1	新田義之他	1978
ルドルフ研*7	ルドルフ・シュタイナー研究 第3号*1	新田義之他	1979
ルドルフ研*7	ルドルフ・シュタイナー研究 第4号*1	新田義之他	1979
ルネッサンス・アイ	牧会医学講座 医師と牧会者の共働	佐藤俊夫 (1)	2014
ルネッサンス・アイ	アントロポゾフィーの人間認識と医学	佐藤俊夫 (1)	2015
ルネッサンス・アイ	医療を深めるための瞑想的考察と指導	佐藤俊夫 (1)	2017
ルネッサンス・アイ	霊学に基づく生理学と治療学	佐藤俊夫 (1)	2019
Kindle	精神科学の立場から見た子供の教育	大西そよ子	
Kindle	マルコ伝	市村温治	
Kindle	精神科学と社会問題	新田義之他	
Kindle	神秘学概論	高橋巖	
Kindle	神智学	高橋巖	
Kindle	いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか	高橋巖	
Kindle	自由の哲学	高橋巖	
Kindle	イエスからキリストへ	西川隆範	
Kindle	神秘的事実としてのキリスト教と古代の密儀	西川隆範	

Kindle	エーテル界へのキリストの出現	西川隆範	
Kindle	いかにカルマは作用するか	新田義之	
Kindle	人智学・神秘主義・仏教	新田義之他	
Kindle	シュタイナー キリスト論集	西川隆範	
Kindle	メディテーションをもつてものにする人間学	鈴木一博	
Kindle	シュタイナー マルコ福音書講義	西川隆範	
Kindle	シュタイナー 古代秘教講義	西川隆範	
Kindle	シュタイナー 仏教論集	西川隆範	
Kindle	農業講座	森章吾	
Kindle	教育の基礎としての一般人間学	森章吾	
Kindle	神智学	森章吾	
Kindle	神秘学概論	森章吾	
*8	シュタイナー, R. 「ゲーテの黙示 ゲーテ生誕 150 周年のために」 *8	井藤元	2004
*9	R. シュタイナー 『『ファウスト』によって開示されたゲーテの精神様式』 *9	井藤元	2014
未公刊 *6	神秘劇 [第3劇・第4劇]	香川裕子	

## 6 むすびとして

本稿では、これまでに出版された邦訳情報を可能な限り網羅的に収集し、その一覧を作成した。本稿の後半に示した2つの邦訳リストが、その主要な成果である。

今後は全集版との対応関係を明らかにするとともに、どの巻のどの講演が翻訳されており、その翻訳がどの本に収録されているのか等々が容易にわかるようなリストを作成したいと考えている。

### 主要参考文献およびウェブサイト

河西善治『「坊ちゃん」とシュタイナー』 ぱる出版、2000

西川隆範『シュタイナー用語辞典』 風濤社、2002

ほんの木編『シュタイナーを学ぶ本のカatalog』 ほんの木、2002

ヨハネス・ヘルレーベン、河西善治『シュタイナー入門』 ぱる出版、2001

シュタイナー研究室－シュタイナー全集紹介

<http://www.bekkoame.ne.jp/~topos/steiner/gesamt/gesamt.html>